

歴史認識問題研究会特別集会

安倍晋三元首相と歴史認識問題

令和4年12月18日 於全国町村会館

基調講演：衛藤 晟一（参議院議員・元総理補佐官）
パネラー：伊藤 哲夫（日本政策研究センター代表）
西岡 力（麗澤大学客員教授）
高橋 史朗（麗澤大学特別教授）
（コーディネーター）江崎 道朗（評論家）

開会挨拶

西岡 今日はお寒い中お集まりくださり、ありがとうございます。私は歴史認識問題研究会の会長を務めさせて頂いている西岡力でございます。私どもは、歴史認識問題は独立国家の基本である、しかし、特に1990年代から歴史認識問題に関する誹謗中傷が国際社会に広まっている。政府は謝罪してばかりで、足して二で割ったような人道支援などをして、事実在即した反論をしていないという強い怒りを持っていました。そこで、何人かの学者や研究者と協力して歴史認識問題研究会を結成したのですが、同じ問題意識を持っていたのが安倍晋三元総理大臣でした。その安倍さんの同志が本日お越しくださいました、衛藤晟一先生です。

衛藤先生は第二次安倍政権の時に補佐官で官邸に入っておられましたが、国事担当と言って、国に関わる多くの問題を扱われたのですが、その大きな部分の一つが歴史認識問題でした。官邸の中に歴史認識問題担当の補佐官がいて、副長官補という役職があり、外務省から出向してくださっている人が歴史認識問題を担当するという枠組みを作ったのは、安倍元首相だったのです。

その安倍元首相が凶弾に倒れて殉職されてしまいましたが、安倍元首相は様々な分野で戦いを挑んだ。ご本人も「政治家には戦う政治家と戦わない政治家がいる」と仰っていて、自分は戦う政治家であると表明しておりました。その安倍元首相の戦いの一つのフィールドが、歴史認識問題だったのです。安倍元首相の歴史認識問題の戦いを振り返って、私たちは何を引き継ぐべきなのかということを考えて、本日の集会を企画いたしました。

まずは、安倍元首相の最側近として、一緒に戦ってこられた衛藤晟一先生に講演をいただきます。衛藤先生、宜しくお願い致します。

基調講演

衛藤 只今ご紹介頂きました、参議院議員の衛藤晟一でございます。大変過分なご紹介を頂きました。安倍元首相の歴史認識問題に関する戦いのことに関して、お話をさせて頂きたいと思えます。

安倍元首相は平成5年7月に初当選されました。平成3年5月15日に、お父様の安倍晋太郎先生がお亡くなりになりました。その後を受けて、安倍元首相が立候補するという話になり、平成5年の選挙で初当選されました。私は3年前の平成2年の2月に選挙で初当選させて頂いておりまして、当時から安倍派でしたので、晋太郎先生の秘書をされていた安倍元首相とは顔見知りでしたが、ゆっくり話したことはあまりありませんでした。

平成5年の初当選後に、一緒に勉強会をやろうと、ここに居られます伊藤哲夫先生や高市早苗さんと一緒に勉強会をスタートしておりました。その前に、平成元年は非常に大きな転換期でありまして、6月に中国で天安門事件が起きました。民主化はしない、経済は自由化する、そして強大な国になるんだという意思を、中国がはっきり示した事件ではないかと思えます。さらに11月にベルリンの壁が崩壊しました。日本で言うと、同じく11月に「連合」が結成されて、労働運動が変わった年でもあります。社会党系の「総評」と、民社党系の「同盟」に別れていた時代から、連合の一本になるという時代になり、ある意味、平成の時代は労働組合が非常に強くなった時でもありました。組織率は落ちますが、力は強くなり、非常に強く政治に影響を与え続けた時代でもありました。そういった時代の流れを受けて、平成2年に政治改革議論がなされていました。とにかく政治が腐敗していると言って、選挙制度を変えなければならないという議論が、平成5年まで続いたのです。その結果、平成5年に自民党は政権を失ったわけですが、その時に安倍元首相は若手の一年生議員として、自民党にとって非常に大変な時期に、衆議院議員として初当選されました。

そして平成5年に、これから先自民党はどうするのかといったことを議論していたのです。自民党は、下野するとほとんどは腰が抜けてしまう政党なんですね。権力があることが当たり前、という認識を持っていたと言えます。権力を失った時にどうするかが分からない状況だったわけです。平成5年は政権の座から離れた時にどうするか、という議論が始まった。その時に私は石原慎太郎先生たちと一緒に、その議論に参加させて頂きました。平成5年に二年生議員になったときに行った議論は、自民党が政権を失ったことについては、やはりある意味で腐敗していたからではないかという話が出ました。自民党は体質を変えなければならないというのが一点目で、平成に入った自民党が何をするかを明確に決めねばならない、ということも議題に挙がりました。自民党はこれまで、党の使命として戦後の経済が豊かになれば国民全体が幸せになれる、という信念に則って頑張ってきた。その使命が終わったので、今後、自民党はどのような方向で歩むのか、国としての進むべき方向性をどのように示すのかを要求された時代でした。そこで、自民党内部でも党改革議論を始めました。

当時は橋本龍太郎先生が政調会長でしたが、文明史の見方が出来るのは石原慎太

郎先生だけだったので、石原先生をチーフにして、これからの日本の進むべき道を勉強会で模索しました。そこで色々な人と交流をして、一冊の本にまとめました。石原慎太郎先生が「初めて原稿料をもらわずに書いた」と仰った、『二十一世紀への橋』という力作でした。

そのように、日本の方向性を決めなければならないという議論をしたのですが、一年たって政権に戻ったらお蔵入りになりました。しかし我々は、平成5年に議論した中身を継続していこうとしました。

もう一つはこの年、自民党内に綱領を見直す委員会ができました。委員長の後藤田正晴先生が、「綱領から憲法改正の旗を降ろす」という提案をされたのです。その時、猛然と反発したのが我々でございまして、当時四期になったばかりの中川昭一先生、二期になったばかりの衛藤晟一、そして初めて当選した若き日の安倍晋三元首相が一緒になって、この議論に参加しました。手を挙げて、この委員会に入らせてくれと言って、30人の委員会だったんですけれども、若手を糾合して15人入って、侃々諤々の議論をいたしました。憲法改正という旗を自民党が降ろすということは、正に歴史認識問題に関わるどころですが、それをすれば自民党は自民党でなくなるという議論の末、憲法に関しては、「これからの時代に相応しい憲法をつくる」という方針に決まり、この決定が現在に繋がります。

この後、教科書の問題が出てきます。いわゆる「従軍慰安婦」をめぐる議論が起こっていきます。自民党が政権を失う平成5年に、河野談話が出てきます。自民党は平成5年の選挙は負けるだろうから、一刻も早くいわゆる「従軍慰安婦」の問題を決着させた方が良くだろうと考え、韓国からの働きかけもあり、これで最後にすると言うので、石原官房副長官が主導して日本の方から担当者が韓国へ行き、元慰安婦と言われている女性たちの話を聞いて、それ以上追及もしない、ということでした。当時の話をした女性たちの中で、強制連行された人は一人もいませんでしたし、そういう証拠もありませんでした。親から売られたとか、自分から身を売ったという話だけだったのですが、その点を詳しく調べないで、話だけを聞いて帰ってきました。その代わり、韓国は日本非難をこれで終わりにするという約束でした。それを信じて、どうせ政権が変わるのであれば、話がややこしくなる前に解決しておこうと考えたのですが、結果的にそれが裏目に出て、あの河野談話が出るという悲惨な状況になってしまいました。

平成7年には村山談話が出て、歴史認識が日本において滅茶苦茶になり、どうもおかしいということで我々は勉強会の設立を決意するのです。その間にユネスコなど国連に日本が訴えられてクマラスワミ報告が出て、日本はいわゆる「従軍慰安婦」として、女性を強制連行したんだという、実態とは違うことが事実として通用するようになってしまいました。これに外務省は一度は反論するのですが、外国に向けて書かれた反論文を全部回収してしまうんですね。誰の指示で回収したのか、今でも判っていません。いくら調べても判らないんですね。

平成8年に選挙がありまして、その頃には教科書の中にもいわゆる「従軍慰安婦」の記述がどんどん載るようになっていた。この時、安倍元首相は二期生となり、私は三期生となります。選挙が終わってすぐに勉強会をスタートし、平成9年の2月に「日

本の前途と歴史教育を考える若手議員の会」を発足させました。自虐史観であると声高に叫んでも解決しないという認識を持ち、科学的・論理的に整理していこうという認識を共有しました。その時に事務局をお願いし、相談に乗って頂いたのが本日おられる伊藤哲夫先生でした。事務局を全て担って頂き、どのように行動するかを考えました。例えば、いわゆる「従軍慰安婦」はあると言っていた吉見義明教授と疑問視していた藤岡信勝教授に来て頂いて、各々20分ほど話した後にディベートするという形で議論をしてもらいました。西岡先生や高橋先生にも講師としてお越し頂いて何十回も議論を積み重ねて、その総括を『歴史教科書への疑問』（1997年）として出しました。

結論としましては、「強制連行」という事実は一件もなく、朝鮮人女性を「性奴隷」にしたという事実もない、ということがはっきりと判りました。歴史的な評価に耐え得る勉強会となりました。この勉強会が、安倍元首相の歴史観を形成する上で非常に大きな役割を果たした、と私は思います。それが、第一次安倍政権での教育の議論に結びつき、教育基本法の改正に繋がり、画期的な書き込みがなされます。豊かな情操と道徳心を培うこと、また、勤労を重んじる態度を培うこと、公共の精神の尊重、命を大事にして自然を大切にすること、自国と郷土を愛する心を持つこと、これらのことを教育で教えなければならないとしたのです。これが戦後の教育から脱却する上で、大きな転換点となりました。現代日本の教育は、戦後教育から完全に脱却したとは言えませんが、大きなきっかけは第一次安倍内閣がつくってくれました。これも大きな意味では、歴史認識問題を考える中で行われました。

第二次安倍政権になると戦後70年談話に取り掛かり、安倍談話として発することができました。いつまでも謝罪ばかりして、次世代や孫の代にまで謝罪を続けさせるようなことでは、明るい未来を切り開けない。河野談話や村山談話は修正したり取り下げることはできませんから、新しい談話を出すしかない。謝罪を繰り返すことは止めようという、歴史に対する一つの評価を下したものが70年談話でした。この意義は非常に大きかったと思います。談話を出す過程の中では色々な議論もありましたが、結果的には70年談話は、当時の国際社会の中における日本の立場を客観的に示すことができた内容となりました。

私も驚いたことは、オバマ大統領の時に安倍元首相と一緒にハワイに行ったのですが、ハワイのビジターセンターが変わっていたことです。かつては、日本は不意打ちをしたけしからん国だと紹介されていましたが、当時の館長がその言説を否定して、世界恐慌が起こってブロック経済となり、日米戦争が起こったと説明していました。70年談話によって、日本とアメリカの真の和解が成ったと実感しました。

歴史認識というのは国家にとって極めて大きな問題でありまして、私もコツコツとやってきたという自負がありまして、その中で安倍元首相は大変な勉強をされて頑張ってきたと考えております。安倍元首相の歴史認識の問題と死生観の問題が、非常に大きな安倍晋三という人間をつくりあげてきたと思います。

ご葬儀の時に、昭恵夫人が最後に謝辞を言われました。「夫安倍晋三は、父晋太郎先生が亡くなったときに、吉田松陰先生の留魂録の話をしていた」と。父も亡くなったのは偶々67歳で、夫と同じ年でありましたと。安倍晋太郎先生が67歳でお亡くな

りになったことは早かったかもしれないが、父の中に67年の春夏秋冬があったという、松陰先生の留魂録の言葉を入れていた。夫もそうでしょう。それぞれの人生の中で10年には10年の、20年には20年の、30年には30年の、各々の人生がある。数日しか生きない夏蟬の中にも人生がある。春夏秋冬がある。吉田松陰先生は30歳で亡くなっていて、早いと思われるかもしれないが、その中にも春夏秋冬はあった。そして事を成したとは言えないかもしれないけれど、必ず自分の志を継いでほしいと。だからこの吉田松陰先生の留魂録の、同志にあてた遺書の部分の書き出しは、「身はたとい武蔵の野辺に朽ちぬとも留め置かまし大和魂」。そして日本の為に最後まで頑張るんですよと。そのことが同志に受け継がれていって、必ず実を結んでいくであろう、というのが吉田松陰先生の留魂録です。安倍元首相もそういった覚悟を持って、国会議員選挙に出た。留魂録を引用して、自らの死に対する覚悟を決めて出馬した。そのような感じがします。

さらに、「創生日本」という議員集団を我々は創り、第二次安倍政権をスタートさせたいと頑張ってきたのですが、第二次安倍政権が終わって、創生日本は140人位いるのですが、そのうち60~70人で久しぶりに椿山荘（ちんざんそう）に集まりました。椿山荘は山縣有朋の邸宅の跡です。その時に安倍元首相は、山縣有朋は伊藤博文の死に方がうらやましいと言っていた、というエピソードを話していました。伊藤は吉田松陰先生の弟子で、他の優秀な吉田松陰の弟子は既に亡くなっていました。「己は平凡な人間でおめおめと生き長らえている。だから死ぬときだけは畳の上で死にたくない」と、伊藤は言っていたそうです。普通は畳の上で死にたいと言うものですが、それが伊藤博文の口癖であったそうです。安倍元首相は、伊藤博文がそう言っていたことも知っている。そしてその死に方を見て山縣有朋が、「伊藤がうらやましい」と言っていたことも知っていたのです。やはり、安倍元首相もそのような覚悟を持って、国政に臨んでいたのではないのでしょうか。

第二次安倍政権の時には、新しい日本の時代を切り開きたい、日本を取り戻したい、美しい国をつくりたい、尊敬される国にしたい、戦後レジームを見直して日本の新しい朝を創るんだ、という願いを込めました。教育・文化・外交・安保など、多岐に渡る政策を進めていったのが第二次安倍政権でした。ですから、私が申し上げたいことは、安倍元首相は歴史認識の問題を、平成5年の初当選の時から一貫して深められました。勿論その前からも、相当な勉強をされておられたと思いますが、それを確固たるものにして、第一次安倍政権では教育基本法の改正という戦後初めての偉業を成し、第二次安倍政権の時には70年談話から始まり、集団的自衛権の見直しなどにメスを入れて、日本を改革していったのです。そして、安倍元首相が本気で取り組んでいた残りの問題が何であるかを、我々は良く存じ上げております。

御皇室の問題に関しましても、第二次安倍政権時に上皇陛下が退位の意向をお話しになりましたが、これも非常に大変なことでした。現行の皇室典範には在位中の退位の規定はないのです。ご存命中に代替わりすることは、全く想定していない。しかし、今の上皇様は平成28年8月8日のテレビで、譲位のご意向を表明されました。さあ、どうするかという話になりまして、一時は大混乱しましたが、過去の歴史を全て洗い直して、可能にしていく方針を取りました。昔は、恣意的な退位が行われて

いたからです。それはやはり困る、と。しかし今日においても、例えば天皇様もご病気になるられて、それが何年も続くという可能性もあり得るのです。私どもは安倍元首相と共に介護保険を創りましたが、介護保険というのは昭和の時代までは倒れると普通、何ヶ月かで亡くなられていたのですね。しかし平成に入りますと、倒れてから数年間存命する場合もあるわけです。もし天皇様を生かすためだけであれば、現代の医学ならば可能となってくる。天皇様の御勤めは国民の為に祈ること、国民に寄り添うことですが、これができなくなってしまう。その時に天皇制がどうなるかわからないので、そうなる前に交代させてほしいとお考えになられたのでしょうか。安倍元首相とそのような話をしました。陛下のお気持ちを察したとき、どういう解決策があるのかを真剣に考えました。「特別法でやる」という安倍元首相の決断と決意がなければ、できなかったでしょう。

皇位継承問題に関しましても、男系による皇位継承の伝統を重く受け取め、第二次安倍政権の時から真剣に議論してまいりました。菅政権時に始まった政府の有識者会議でもとりまとめが行われ、我々が検討・提唱してきた旧宮家の皇統に属する男系男子の子孫の方々に養子となつていただく案等が盛り込まれ、令和3年12月に岸田総理に報告書が提出されました。そういうことを渾身の思いで皆で努力して、指針を出してまいりました。これは歴史認識だけではなく、安倍元首相の死生観に基づいて、本当に腹を決めてやってこられたのだと思います。

第二次安倍内閣がスタートする時に、私ども創生日本で安倍元首相の出馬を促しましたが、その時にも相当に侃々諤々の議論をいたしました。その時に私は最後に安倍元首相に、「このまま民主党政権が続けば、日本は本当に潰れるかもしれない、経済もガタガタでGDPも落ちている。この状況の中で政治家として立ち上がらないのはおかしい。安倍さん以外の立候補者に期待はできない。できない以上、あなたが立ち上がらなければならぬ。国の危機の時に立ち上がらなければ政治家を辞めた方が良い」と、言い過ぎかもしれませんが、申し上げました。ただ、こういう時に政治家は出馬の進退は言わないものですから無言でしたが、腑に落ちた様でした。その後西田昌司さんが、安倍元首相に「どちらが良いですかね？」と尋ねたら、安倍元首相もその時は腹を決めており、テーブルを叩いて「私はやる。国の危機に立ち上がらないようならば意味はない。どんな問題があろうとも、私は断固としてやる」と言ったそうです。第二次安倍政権のスタートにあたっては、まさに天が動いたように、安倍元首相に出馬の舞台が回ってきました。それもやはり、安倍元首相の歴史観や死生観というものが、断固とした決意が、日本を動かしていったのであろうと思います。

そういった意味で、我々は安倍元首相の歴史認識や死生観といったものを受け止めて、残された者として、まさに吉田松陰先生が留魂録の中に書いた、自分が死んでも己が蒔いた種が必ず芽を吹き、実を成すと言ったことを信じて、この国の為に我々も覚悟を決めて物事に臨みたいと考えております。

本日は大勢の方にお越しいただき、ありがとうございました。

西岡 衛藤先生、有難うございました。